

Title	公開シンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」2008年度: 中国における課程標準改革の動向 -義務教育を中心に-
Author(s)	
Citation	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして(2012), 活動報告書(2007-2011年度): 219-231
Issue Date	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/179666
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

「中国における課程標準改革の動向
— 義務教育を中心に —」

高 峽（中国中央教育科学研究所）

先ほど杉本先生が紹介してくださいましたように、私は中国でカリキュラム・スタンダードを作った一人であり、そして今その改正の仕事をやっております。今日は中国における課程標準改訂の動向について発表させていただきます。また、今日は時間の限りがありますので義務教育を中心にしたいと思います。

スライド 1

今日お話したいことには、6 つのテーマがあります。一つは全体として中国の歴史から見た中国課程標準改訂の振り返り、そして課程標準の概要、実施と、それから議論、今の改訂、そしてこれからの課題です。

スライド 2

いわゆる課程標準というものは何でしょうか。課程標準という言葉の出始めを中国の政府の文献から見ると、1923 年のことです。中国全体の学校システムが作られたのは、1902 年のことです。そして 21 年のあと、やっとスタンダードができました。それで、23 年からあと 12 年の間にずっと課程標準という言葉を使いました。そして、中華人民共和国ができた後、1952 年から 2001 年の間に、この 10 年の間に課程標準という言葉を使わずに、教学大綱という言葉が使われるようになりました。その言葉は、ソビエトの言葉だったものです。英語で言えば **program** という言葉がありますが、それを中国で使っています。しかし、この新しいカリキュラム改革をする場合は 2001 年から今まで、課程標準という言葉を使うようになりました。そして、今日言っているのは、だいたい 2001 年からのこの課程標準というものです。このような言葉は日本の場合はやはり学習指導要領ということに当たるでしょうね。

スライド 3

そしてこのような課程標準が登場する背景としては、一つには諸国の改革の示唆がありました。主にアメリカの「**Standard-based movement**」という改革から示唆を得て影響を受けて、このような中国の **Standard-based** の改革をやるようになりました。そして日本の学習指導要領の改革も中国にある程度影響を与えました。

スライド 4

そして同じ言葉ですけれども、中国語で課程標準、アメリカでスタンダード、カリキュラム・スタンダードという言葉が使われていますけれども、すこし意味が違います。みなさんご存知のように、アメリカの場合と中国の場合は行政が違います。中国はだいたい日本と同じで全国统一されたカリキュラムなのですが、アメリカの場合はやはり各州のカリキュラム、自分の州のカリキュラムが作られたんです。だから中国の場合は、このカリキュラム、課程標準というものは教材・授業・評価の根拠で、国からこのようなものによって、課程の管理・評価をするんです。アメリカの場合は全国の、例えば数学のスタンダードというか、科学のスタンダードというか、だいたい指導のもので、提案で、各州のスタンダード作る場合は参考になるものなんです。だからこのようにところから考えてみれば、やはり違う点があります。

スライド 5

そして中国の課程標準が登場するもう一つの背景としては、やはり自分の教育実践に対する反省がありました。反省というのは、先ほど言いました昔の教学大綱というものは、やはり授業を中心にして、授業の中で何を教えるべきかということについて詳しく書かれてありました。けれども全体として課程やカリキュラムへの意識というものはないんです。だからこのような課程標準ができるのは、やはりこの課程への意識を強くしたいわけですね。もう一つ、皆が反省していたこととして、中国の教育内容は複雑で難しい、そして古い、といった色々な問題点がありました。けれども、これからはやはり子どもの生涯学習を目指して内容を精選しなければならない、そして生活との関わりや、今の社会の科学技術の発展との関わり、そういうようなことを考えなければならないと指摘されました。

スライド 6

同じ課程標準の枠組みだけれども、教学大綱と比べてみれば、やはり色々と違うところがあります。たとえば今ピンク色で示しているところは、これは重要なポイントです。やはり昔はね、そんなに明確な課程目標はなかったんです。一般的な教育目的は各学習指導要領の中に書いてあったんですけれど、今の課程標準には、「知識と技能」、「過程と方法」、「感情・態度と価値観」というような三つの目標が作られました。これは一つの大きなポイントです。ここで皆さんに見ていただいている中で、皆さんが気になることがあるかもしれませんね。日本とちょっと違って、感情・態度は、ただ科目に対する意欲・関心・興味・態度じゃなくて、全体としてわりに道德教育の意味も含まれています。だから価値観もここに書かれています。そしてもう一つ大きなポイント、変わったことは、この「学習領域、目標、基準及び案例」、このようなものはもともとの教学大綱の中ではなかったんです。今の課程標準で出来たものなんです。

スライド 7

まとめてみれば、新しい課程標準というものにはいくつかの特徴があります。例えば課程標準に素質教育の理念が明確に現れています。そしてとても学習方法を中心にしています。もう一つは各学年じゃなくて学習段階に分けて目標を設定して、目標に至る学習内容の前後順序は詳しく決めていないけれども、だいたいの枠は書いて自由に、やはりその教材と授業の多様性を目指して促進するためにそのようなものが作られたということです。

スライド 8

しかし、同じ枠組みの中で、違う科目の内容基準はやっぱり違うところがあります。例えば国語の場合は、能力表現によって設定したんですね。このことはやはり英語で、**performance** という言葉が使われてね、このようなものによって設定した内容ですね。そして英語の場合は段階によって、発達段階によってスタンダードが作られたんです。

スライド 9

この表の中は総合的科目ばかりです。このような総合的科目には気をつける点があります。学習内容によって、内容基準を設定するんです。

スライド 10

もちろんこの課程標準を実施するためにいろんな研修をやります。ですから、共通的な、あるいは科目別の批判であったり、あるいは教材に対しての意見であったり、いろいろと意見がありました。

スライド 11

実施する事情については、全体からいくとこのような歩みがありました。最初 2001 年の 9 月から全国の 42 のパイロット地域で実験して、すぐ全国でやったのではなくて、やはり少しずつ広くして、少しずつ全国に施行するようになりました。去年まで、最初してきたパイロット地域の小学校では六年生まで一回り、中学校では三年生まで二回り新しい課程を実施しました。

スライド 12

この課程標準の実施効果としては、四段階があります。この四段階は、中国が新しいものを、全国がどのように受け入れて、それを研修して実行して、評価して、最終的に反省に基づいて調整していくようになったかを表しています。このようなことがいえると思います。そして、この実行する間に、教育部から全国の教師へのアンケート調査を行っています。実はここ（スライド）には二回実施したと書いてあるのですが、実は 07 年のときももう一回やりました。完成する直前にもう一度やりました。

スライド 13

こういう調査から見ると、その設計理念に対して多数の先生たちが賛成していることがわかります。この図から見ると、**96%**です。ものすごく多いです。だからみんな、「いい理念だ、すばらしい。」と言っています。

スライド 14

そしてこの課程標準の理念を実現する可能性に対して、教師たちの答えはこの図に示したように、だいたい**81%**が可能だと思っています。

スライド 15

そして、課程標準の内容を実現できるかどうかについてアンケートを行ったら、やはり**90%以上**の先生たちは、やや難しいがちょうどいい、だいたい実現できると答える人が多いことがわかりました。

スライド 16

新しい課程標準実施以来、現場から見ると、やはりいろんなことが変わりました。特に、子どもたちが生き生きしているのです。子どもたちが授業の中で質問したり、活発な発言とか検討とか、いろんなものを作ったりとか、そのような授業があちこちに見られるようになりました。けれども先生たちは、その中身については、前勉強したものとこれから勉強するべきものとのつながりがちょっとずれるものがあると感じています。だから先生たちは心配していて、やっぱり昔の教科書を持っておいて、何か教えなければならないということが普段多くなりました。もう一つは、このような新しい課程標準を実験するために先生たちは精一杯頑張って、仕事が沢山どんどん、どんどん増えてきていることです。先生方がプレッシャー、圧力に感じているという状況です。このように、現在から考えると良い点もあるし、それから問題点もあります。

スライド 17

それから課程標準を発表し、実行して以来、学者たち、教師たち、いろんな人から、もちろん社会でも、このようなものに対していろんな議論がなされるようになりました。昔はみんな、課程標準とは何か全然知らなかったんです。今このような発表された論文数から見るとすごいなと私も思います。

スライド 18

次は目標のことです。先に見ましたように、この**3つ**の目標はお互いの相互関係というのがピラミッド型というか、そのような関係です。そしてここに示したように、この左の三角形には矢印が二つあります。この二つは違う考えです。左側の、この上から下への矢

印は、もともとこのような考え方を持っている人がいます。感情態度・価値観ということが一番基礎的なことと思われて一番重要なことで、これに基づいて勉強して授業を受けて方法を学んで、後は知識・技能となります、というような考え方を持っている人がおります。もう一つは、下から上に矢印があります。これは知識と技能が一番基礎的なことです、という考えです。そして、長期的な狙いは感情態度と価値観です。このようなものは学校の考え方です。右側のこの三角形は、だいたい大方の考え方かもしれないです。知識と技能、過程と方法そして感情態度と価値観は、人の素質の三つのことで、どれが欠けても駄目です、という考え方です。

スライド 19

だからこのようなことについていろんな議論もあります。ある人は過程と方法を一番重視していて、やはり知識を身に付けても、方法がわからないと駄目ですと言います。しかし他の人はやはり知識と技能というものは基本的目標で学力の核心であり、そして試験などの評価の方法でその水準を測ることができるという考えを持っています。やはり見方が違います。ただ、どれを重視するかはともかく、みんな共通点があります。共通点というのはこれです。三つの目標にどのように準拠した評価をするか。特に「感情、態度、価値観」というのは明確でないですから、評価はさらに難しいです。特に価値観といわれているのですから、これはものすごく難しいことです。

スライド 20

そして課程標準における理念に対して議論もありました。ここで理念として、数学の課程標準の中で理念を述べました。一つは「人々が価値のある数学を学ぶ」。けれども、価値のある数学というのは何でしょうか。二番目は「人々が必要な数学を習得することができる」。誰が必要性を判定するのでしょうか。三つ目は「人それぞれが数学において異なる発展を獲得する」ことですが、それは言わなくても当然のことです。当たり前でしょうという、いろいろ言い方はありました。

スライド 21

そして課程標準の内容基準に対して一番大きな議論はやはり、内容基準の根拠は何かということです。もともとはやはり知識の系統性を重視したのだけれど、いま子どもの経験を重視して子どもの経験を重視する場合はどのようなものによって内容を作るのですかということです。もう一つは、精選、この言葉は日本から学んだのですが、でも精選とは、その根拠は何なのでしょう。何が子どもの一生に関して必要なことですか。そういう議論は難しいということで、もちろん他のものもまだあります。例えば、スパイラル型の目標設定の合理性は何でしょうか。今、重なっているところがたくさんありますので、今こういう風に合理的にその水準を決めるか、そういうことはまだわからないのです。

スライド 22

そして、今の課程標準の改訂をやっていたんですが、発表していないけれども去年から教育部で、改訂する原則として一応作りました。だいたい基本的な方向、改革の方向、そして枠組みは変わらないです。その中で、いろんな意見が出たんですが、今の授業時間は変わらないです。生徒の学業負担を注意しなければならないのです。こういうようなことを指示したんですが、もともとは、去年で一応仕事が終わって今年は新しいスタート、課程標準を発表する予定だったのですが、でも今までもう半年以上たっているけれどもまだ発表していないんです。これはやっぱりいろんな事情があります。

スライド 25

数学の場合は課程標準を改訂しました。他の教科より、数学課程標準が一番早かったんです。2004年から2006年の間にやっていたんです。やっぱり数学という科目は、全社会で注目されました。このピンク色のところは大きな変化がありましたところですね。黄色のところはやや少し変わったところです。

スライド 26

具体的に言えば、例えば目標のところでは、もともとは基礎知識、基礎技能、という二つの基礎がありますから、新しいものができたときに、基本思想と基本活動経験を加え、四つの基「四基」、このようなものになりました。そして、教師たちが使いやすいようにたくさん例を出したんです。今数えてみれば、課程標準の中で80以上の例を出したんです。このようなものはやはり大変な仕事でしたが、簡単に、わかりやすいようなものになりました。

スライド 27

そして、一応訂正をしたんだけど、これからの中国のカリキュラム、このスタンダードというものには、いろんな課題が残されています。たとえば「学習段階の設定の統一性」ということです。今各科目の間に違う設定があります。たとえば数学の場合は一年生から三年生までが第一段階、四年生から六年生までが第二段階、七年生から九年生までが第三段階です。けれども国語の場合は一年、二年で一段階、三年、四年で二段階で、五年、六年で三段階というように、このような違うやり方があります。これと、学校で授業をやる事情は違います。たとえば、実現場から見ると学校はだいたい低学年の教師はずっと低学年の子どもを教えています。中学年の教師はずっと中学年を教えることが多いです。どうしてかということ、経験があるからです。このようなことにはやっぱり不信があります。もう一つは科目の間の内容の「交差」と「重複」です。例えば、ごみの問題です。ごみのことが、低学年の生活科、三年生からは社会科、数学、小学校の理科、中学校の生物、それから科学、このようなたくさんの科目からどんどん出て、子どもたちから、「またごみ

か！」という声が出たんです。こういうようなことをどういう風に合理的に作るのかがまた問題です。そして低学年と高学年のつながりはまだうまく解決していません。一番難しいのは成績に対する評価をどういう風にやるかということです。これは今大きな問題です。新しい課程標準は「プロセス・アセスメント」をととても重視しています。けれども、高校入学試験の場合は一回しかないんです。子どもたちがこれまでに何をやってきたかは全然考えないんです。だからこのようなことになったら先生たちはどういう風に教えればいいのか。子どもたちの何を重視しなければならないか。これがまた問題です。

どういう風に解決するか、私たちはまた考えてそれから一生懸命頑張って、こういうことを上手く解決していければ、またみなさんに報告します。ご静聴ありがとうございました。

記録：小山 英恵（教育方法学講座 M1）

中国における課程標準改訂の動向 —義務教育を中心に—

中国 中央教育科学研究所
研究員 高 峽

2008年7月31日@京都大学
gaoxia0823@yahoo.com.cn

全体の流れ

- 1 基礎教育における課程標準改訂の振り返り
- 2 課程標準の概要
- 3 課程標準の実施
- 4 課程標準についての議論
- 5 課程標準の改訂
- 6 課題

1

1 基礎教育における課程標準改訂の振り返り

- 1902—1923年 学校規約に現れたスタンダード
- 1923—1952年 課程標準綱要
- 1952—2001年 教学大綱
- 2001—現在 課程標準

※ 「課程標準」、「教学大綱」は「学習指導要領」にあたる。
以下の「課程標準」は2001年からの新しい課程標準を指す。

2

2.1.1 課程標準登場の背景—諸国改革の示唆

- 主に、アメリカの「Standard-based movement」の影響
- 日本の「学習指導要領」
→ 内容の精選

3

課程標準—アメリカのスタンダードとの違い

	アメリカ	中国
目的	● 基準、質を高める	● 集中から多様のへ 知識から実践へ
編集、発行	● 学術団体、民間組織	● 教育部をはじめ各大学、研究機関の学者が編集し、教育部が発行する
性質	● 指導、提案、参考	● 教材・授業・評価の拠り所であり、国家による課程の管理・評価の基礎である

4

2.1.2 課程標準登場の背景—教育実践の反省

- 教学→課程
- 統一性→柔軟性
- 複雑、難しい、偏り、古い→基礎的、共通的
- 内容の精選
- 生活と関わり、科学技術の発展との関わり

5

2.2 課程標準の枠組み―「教学大綱」との比較

	教学大綱	課程標準
前文	科目の位置づけ	課程の本質 課程の基本概念 設計構想(学習段階、目標、学習内容、実施 提言について)
課程目標	課程の目的、目標(概括的)	知識と技能 過程と方法 感情・態度と価値観
内容標準	授業内容(知識と技能)、授業目標	学習の領域、目標、基準及び案例
実施提言	授業提言 授業の時間数について 教授中における注意すべき問題点 テストと評価	授業提言 評価提言 教科書の編成 リソースの開発と利用

6

2.3 課程標準の新しい特徴

- 課程標準に素質教育の理念が明確に現れている。
→ 三つの目標を中心に
- 教科主義から実生活との関連を重視する。
- 学習方法を変える。
→ 結果的目標と体験的目標を設定する。
- 評価提言がより使用者により使用しやすいようにした。
- 学習段階を分けて、目標設定する。目標に至る学習内容の前後順序は細かく決めない。教材と授業の多様化を促進する。これは「教学大綱」と大きな区別である。

7

同じ枠組みの中、内容基準の部分が各自の特色を持って、異なる
→ 能力表現によって設定する(国語)
発達段階によって設定する(英語)

科目	内容基準	付録
国語	言語技能 言語知識 学習策略 文化意識	暗誦のための優れた詩、文章 のすすめ 校外読書のアドバイス 文法、修辭における重点知識
英語	第一学習段階(1-2学年) 第二学習段階(3-4学年) 第三学習段階(5-6学年) 第四学習段階(7-9学年)	(234頁の内、付録が183頁) 音声項目表 文法表 機能表 話題表 技能参考表 授業用語 語彙表

8

学習内容によって内容基準を設定する
(総合的科目:歴史と社会、品德と社会、科学、芸術)

	内容基準	付録
品德と社会	私は成長する 私と家庭 私の故郷 私は中国人 世界に近づく	無
芸術	芸術と生活 芸術と感情 芸術と文化 芸術と科学	芸術における 能力発達水 準表
科学(7-9学年)	科学探求(過程、方法、能力) 生命科学 地球、宇宙と空間科学 科学、技術と社会の関係	案例(15個) 知識技能の 目標の動詞

9

3.1 課程標準実施のための教員研修

- ①「通識」研修:地方の教育行政部門などの管理者を対象に
→ 新しい課程標準について共通認識を持つことができた。
- ②教科別「課程標準」についての研修:教師を対象に
→ 担当する教科の課程標準についての理解と把握。
- ③教材についての研修:教師を対象に
→ 教材内容の理解、教材の使い方を把握する。

10

3.2 課程標準の実施状況

- 課程標準が全国で実施するまでの歩み
2001年9月から42のパイロット地域で実験した、児童生徒の0.37%(47万)
2002年全国の児童生徒の4.77%(895万)が新しい課程に入っていた。
2003年全国の児童生徒の19.0%(3500万)が新しい課程に入っていた。
2005年全国の小学校1年生、中一生徒の100%が新しい課程に入っていた。
☆ 2001年から2007年まで、最初に指定したパイロット地域の小学校では、六年生まで一回り、中学校では三年生まで二回り新課程の実験を終えました。

11

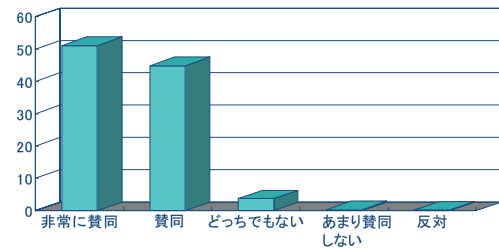
3.3 課程標準の実施効果

8年間の課程標準の実施は四段階に区分できる

- 教育行政、学校管理者と教師の研修、理解する段階
 - 教師が実行する段階
 - 教師の教育活動によって、問題が発生し、疑う段階
 - 課程標準編集者、教科書編集者の反省、調整する段階
- ☛ 教育部の全国の教師へアンケート調査からみる新しい課程標準
(2001年、2003年二回を実施した)

12

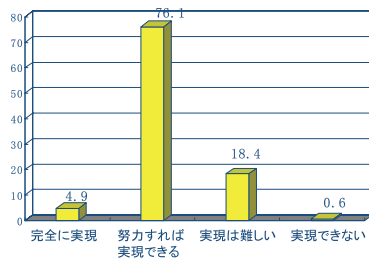
課程標準の設計理念について



⇒ 设计理念を賛同する教師は96%。

13

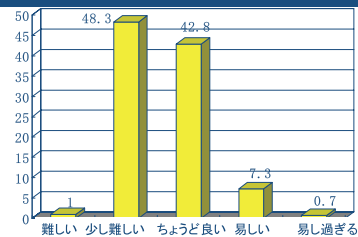
課程標準の理念を実現する可能性について



⇒ 81%の教師は課程標準の理念を実現するのは可能と思っている。

14

課程標準の内容の難易度について



91.1%の教師は課程標準の内容は実現できていると思っている。

15

新しい課程標準が実施以来、授業の変化—教師の声

- ・ 一斉授業から討論型の授業に変わりつつある。
- ・ 新しい教科書は基礎練習が減り、子どもの活発で様々な考えが増えたが計算能力が弱くなり、教科書以外の基礎内容も補充して教えている。
- ・ 授業の雰囲気が活発になった。ただ討論の結果が問題と離れている状況がよくあるため、子どもの結論を肯定すると同時に、授業目標も忘れてはいけなない。
- ・ 授業のための準備の時間が長くなった。子どもが楽しく、能動的に学ぶために授業の工夫をする。
- ・ 教科書の使い方が変わった。以前は教科書を教える。現在は教科書で教える。それ以外の情報も含め、多面的に理解し、浸透する。

16

4 課程標準についての議論

課程標準の実施に伴い教育研究界において新しい課程、課程標準についての議論が止まらなかった。

➤ 課程標準についての研究

2001—2007年、約4000編の研究論文が発表された。

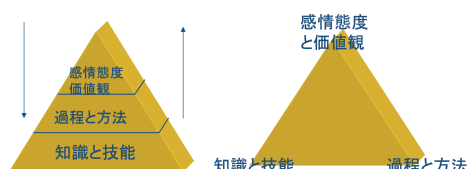
- 初期 学者による海外の理論の紹介
- 中期 教師の学習と理解
- 最近 関係者による解説、評価、反省、批判 (100余編の論文)

17

4.1 課程標準の目標について

● 三つの目標の相互関係

▶ ピラミッド型



18

知識と技能	教科の系統性によるものではなく、学習者の発達、生涯の学習のために必要なもの。	基本の目標で、学力の核心ある。試験などの評価方法で、その水準を測ることができる。
過程と方法	「結論」、「知識と技能の習得」より、「過程」、「学ぶことができる」という学び方法を重視する。	体験、学ぶ過程を経験する。体験が目標でもあり、基本目標を達成する手段でもある。観察によって、評価できる。
感情、態度と価値観	以前の知識と技能だけを重視し、人の感情を軽視すると違い、学習者に目を向く、一人ひとりの感情に関心をもち、道徳と人格に関心を持つ。	発達目標である。教科別の目標ではなく、全教科に共通するものである。評価できない。

☆ 三つの目標をどのように準拠し評価する。とりわけ「感情、態度価値観」に関する目標は明確ではなく、評価はさらに難しい。

19

4.2 各教科の課程標準における理念について

「数学課程標準」の理念を述べる部分では三つの文が指摘された。

- 「人々が価値のある数学を学ぶ」
⇒ 価値のある数学とは何
- 「人々が必要な数学を習得することができる」
⇒ 誰が「必要性」を判定する
- 「人それぞれが数学において異なる発展を獲得する」
⇒ 言わなくても当然なこと

20

4.3 課程標準の内容基準について

- 内容基準の拠り所は何
 - 知識の系統性か子どもの経験
 - 精選された内容、精選の根拠は何。
- スパイラル型の目標設定の合理性と各段階での水準が不明確
- 内容基準はまだ曖昧で、児童生徒がその教科を学習した上、身につけるべき認知と素養を明確に決めてない。
 - 最低基準か理想基準
- 地域の格差による適応の問題。統一した課程標準は異なる地域でどのように使用するか。

21

5.1 課程標準の改訂—具体的な要求

- 調査に基づく
- 児童生徒の学業負担に注意：足し算ばかりで引き算なしにしてはいけない。
- 違う意見を重視、現在の授業時間を変えない、難しくしない。
- 基本的な方向、枠組みを変えない(小学校科学科を除く)。
- 時間：07年末までに修訂完了、08年に公布；08年から教科書の修訂；09年9月から新しい教科書を使う予定。

22

5.2 課程標準の改訂—作業のプロセス

- 改訂作業の時期
2005年4月、「数学課程標準」は最初に改訂し、2007年に他の教科は改訂を始めた。
2008年に改訂した課程標準を発表する予定だったが、延期する見込み。(中国の国情)
- 課程標準研究グループの変化
 - 数学グループは6人から、数学家、教授、算数数学教師を含む14人と増えた。
 - 科学(理科)グループに科学院の教授が参加し、この教科を小学校一年(現在は三年)から教えると決め、課程標準を作り直した。
- 改訂方向
目標と内容基準をより明確、完備、使用しやすいように示す。(動詞、定義)
教材の編成、教師の教授、学習の評価に応じる。

23

5.3 課程標準の改訂—変化

四つの関係を合理的に把握する。

- 過程と結果の関係
- 児童生徒の能動的な学習と教師の教授の関係
- 合理に推理と演繹推理の関係
- 生活の経験と知識の系統性との関係

24

例：数学課程標準の改訂前後の比較

	改訂前	改訂後	
前文	課程の本質 課程の基本概念 設計構想	前文	課程標準の制定の依拠(法律など) 課程標準の性質、役割(教材、授業、評価との関係)
		理念と設計構想	課程の本質 課程の基本概念 (明確に) 設計構想
課程目標	知識と技能 過程と方法 感情・態度と価値観	課程目標	知識と技能(「四基」) 過程と方法 感情・態度と価値観
内容標準	学習の領域、目標、基準 及び事例	内容標準	学習の領域、目標、基準 (減少)
実施提言	授業提言 評価提言 教科書の編成 リソースの開発と利用	授業提言 評価提言 教科書の編成提言	(学習段階を分けて) (学習段階を分けて)
		付録	1 課程目標の用語の定義 2 内容基準と授業の事例

25

➢ 目標の部分では、もともとの基礎知識、基礎技能という「両基」が、その上に基本思想と基本活動経験を加え、「四基」となった。

➢ 目標と内容基準では、知識が更に精選された。「洗練かつ深い」という方向である。

☆ 知識は「教えなくても分かる」、「教えても分からない」、「教えてから分かる」の三種類に分けることができる。三つ目は教育内容である。

アメリカは「広い、浅い」、中国以前は「広い、深い」、現在は「洗練、深い」、そこで子どもの負担も少ない。知識量÷時間数=X。Xが前より大きければ、子どもの負担が大きい。

➢ 付録に数学課程標準の用語の定義と内容基準と事例が含まれた。事例が前より、大量に増え、説明も詳しい。そして番号付で、使用者が調べやすくなり、課程標準の本文も簡潔となった。

26

6 課題

● 学習段階の設定の統一性

- 教科間の違い
- 理論上と学校実際の矛盾

● 教科間の内容「交差重複」

- 従来各教科の系統性を重視することから、教科の間の統合を重視する。ただ、教科間の交流が不足し、内容の重複になった。教科間の共通する内容の配置問題：例えば、ごみ問題をどの教科に入れることが最適であるか。

- 低学年と高学年の学習内容の接続
- 学業成績についての評価(学力評価)

27

ご静聴ありがとうございました！

28